
見える君、見えない僕

凧沚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見える君、見えない僕

【Nコード】

N6765C

【作者名】

風止

【あらすじ】

僕は人が大勢いるところでは息が出来ない。なるべく人が居ないところで過ごす。そんな日々の中見舞いで訪れた病院で君に出会う。

第1話：嫌いなプリン

僕は人が大勢いるところは嫌いだ。

どこに行ってもなるべく人の居ないところを捜す。

息が詰まるというか、息が出来ないというか、とにかく苦しくて苦しくて堪らなくなる。

友達が事故で入院したと聞いたので、お見舞いに行ったことがある。

病院の中に入った瞬間に帰りたくなった。

でも、お見舞いは？嫌いなプリンまで持ってきたのに、自分に言い聞かせて奥に進んだ。

一階の受付や、薬を受け取る待ち合い室、喫煙室、いろいろなところで人が溢れ出す。

どこの廊下を歩いても多くの人と擦れ違い、だんだん気分が悪くなる。

三階の一番奥にある六人部屋が友達の居る部屋だと聞いていた。

しかし、残念なことに三階はあまりにも広く、あまりにも人が多いので近付くことが出来なかった。

休みの日に来たのが失敗だった。

そう思いながら来た道を引き返そうとすると、下の階からガヤガヤと人が上がって来るのがわかった。

逃げるように四階、五階、六階、と上がって行く。

「エレベーターが故障するなんて有り得ない」

「小児病棟のは動いてるのに、最悪」

など、声が聞こえてきた。

話からするとエレベーターが故障し、上に行く用事の人階段に群がっているようだ。

大人の声から、赤ちゃんの泣き声まで様々だ。

子供の声の際立った。

何人いるのだろう？すごい勢いで上がって来るのがわかる。

「四階」

「五階」

「六階、到着ー」

と、子供達の笑い声が響いた。

後から大人の声で、静かにと言。

僕はそれを七階で聞いていた。

人にまみれるのが怖くて、急いで七階に上がった。七階は屋上だった。

エレベーターもなく、階段でしか来れないらしい。

廊下も狭く、部屋が一つもない。窓もなく暗い。

けれども外に出るドアが光り輝いていた。

一直線の廊下をそれに向かって歩いた。

ドキドキしてる。何でだろう？階段を急いで上がったからかな？

少し錆び付いたドアを開けると、風が僕に向かって吹き付けた。

決して優しくない風に打たれながらもドアを開いた。

今日も慣れた足取りで屋上に向かう。

エレベーターは三日経った今でも機能していない。

聞いた話だと二階で止まっているエレベーターに、上から人が落ちたらしい。

確か五階のエレベーターのドアを無理矢理こじ開け、そこから車椅子に乗った男の人が飛び込んだと言う話らしい。

想像しただけで寒気がする。

その人が落ちてどうなったか何て想像したくもない。

エレベーターが復旧しても誰も乗らないだろう。

他にもエレベーターはあるし、階段もある。

故障中と書かれた貼り紙を見てそう思った。

一階の受付や、薬を受け取る待ち合い室、喫煙室、今日も渋々通
つて来た。

階段を上がる前になると、気分の悪さがピークに達する。

いつも少し休憩してからゆっくり上がって行く。一段、また一段、
ゆっくりゆっくり上がって行くと、気分が澄んでゆくのがわかる。

そうしてまた上がって行ける。

二階、（省略）、六階、七階。

「怠い」

暗い廊下を真っ直ぐ歩いて、一つしかないドアを開ける。
君がいた。

今日は風がなく、青空がゆうゆうと続いていた。

毎回思うけど、色素の薄い髪の色。茶色や栗色で表現出来るけれ
ど、何て言うか茶封筒のちよつと濃い色。

ドアの近くに腰を下ろすと、君は気付いて軽く手を上げた。

まだ足は治っていないみたいだ。松葉杖が転がっている。

「俺いつになったら退院出来るのかな？」

片足でケンケンと地面蹴ってギブスの足を浮かせながら歩くと、
僕の隣に座った。

第2話：君と過きごし

一つ年上の君は、高校一年で、進学校の言わば頭が良い人の部類に入る人間だ。

失礼だがそんな風には見えなかった。

優しそうだし、面白いし、どちらかというとスポーツの方が得意に見える。

ぼけーっと空を見上げながら考えていると、君が口を開いた。

「なあ？毎回思ってたけど、お前学校は？」

いきなり痛いところ付かれてしまった。

「さすが進学校！！目の付け所が違うね」

「ボケ、真面目に答えろ」

そうだ。僕は学校に行っていない。

学校に行ったら苦しくなるから、息が出来なくなってきたと死んでしまうから。

君は僕のことを良く知らない。僕も君のことを知らない。当然だ。

まだ出会って一週間も経っていない。

だから君は僕の不思議な病気を知らない。

人が多いところでは息が出来ない。

肉体的にも精神的にも弱いから起こる病気。

両親はそんなことを言っていた。

自分でも原因がわからない。

小学生のときは何も無かった。

それは単に人が少なかったからなのかも知れない。田舎で平和で普通で平凡で、何もかもがふわふわと過ぎていった。

小学を卒業と同時に都会に引っ越した。

都会と言っても村が町になるような、町が市になるようなもので、人口が急激に増えるだけのものだった。

珍しいものは何もない。

全ての大きさが倍になっただけ、学校も駅も病院も大きくなっただけだった。

僕は中学の入学式初日から気分が悪かった。

校門をくぐり抜け、玄関に入る。

そこら辺で記憶が曖昧になる。

確か同じ新入生に声をかけられた気がする。

顔色がそろほどに悪かったのだろうか？大丈夫？と何度も心配そうに聞かれた気がする。

多分ふらふらになりながらも僕は初日から保健室に流れこんだよ
うな…。

あまりにも殺伐とした記憶に嫌気がした。

そんなこと説明しても仕方ない気がした。

君と居ると、全てがどうでもよくなる。良い意味で楽になる。何も考えずに何も口にすることもなく、ただ時間が過ぎていく。

それだけで幸せだった。

「学校はサボりがちなだけだよ。心配しないで」

「そっか」

君は遠くを見ていた。

あまりにも淋しそうな目をしていたので、今にもフェンスを飛び越え、その先にある暗い世界に落ちて行ってしまいそうで怖かった。

風が強くなり、僕等は屋上を出た。

松葉杖をだるそうに扱いながら進む君を見ながら、ゆっくり歩いた。

階段を前にすると、

「邪魔だから持ってて」と松葉杖を僕に託し、片足でトントンと降りていく。

その姿が心配でならなかった。

おぼつかない足取り、屋上に繋がる六階から七階の階段は手摺りがない。

屋上に行くことは歓迎されることではないらしい。

君の足元に目を配りながら同じ速度でゆっくり降りる。

途中の踊り場で少し休む。

「けっこう、しんどい」

笑いながらも、顔が赤くなっている。

片足で歩くのは、それほどに辛いことなのだろう。

壁にもたれ掛かる君は、ふーっとため息を吐いた。

「行くかー」

それから体を起こし、ゆっくりではあるが降りていった。

途中つまづき、転びそうになったので手を貸してあげた。

「悪いな」と恥ずかしそうに呟く君の隣で、僕は君の存在に違和感を感じていた。

冷たいとかじゃない。

温度が無い。ロウソクのような、曖昧な感じだった。

階段を降り、六階に着くと

「ちょっと待ってて」と、僕の手を離れ病室が並ぶ方に歩いて行った。

階段に座り、君を待ちながら先程の違和感を考えた。

何だったのだろう？

手には体温が無く、僕の温度が移るわけでもなく、君の温度が移るわけでもない。

そこに君はいない。

第3話：再確認

映像を見せられている。

悲しい。とても悲しい。

「お待たせ」

声に考えは消えた。

君はどこから借りて来たのか、車椅子に乗っていた。

「これなら移動も楽だろう？」

「確かに、でもエレベーター動いてないよ？」

素朴な疑問をぶつけると、君は勝ち誇ったような顔で言った。

「秘密の道があるのさ」

ニヤリと笑った顔が君らしくて、つついコツチまでにやけてしまった。

「とにかく、向こうまで行くぞ」

君が指し示した方向に僕は青ざめた。

その方向は先程、君が車椅子を借りに行った方向で、病室が並ぶところだ。

君は僕の病気を知らない。ましてや君は僕が病気だなんて思ってもいない。

「大丈夫か？真っ青だぞ？少し休むか？」

学校？違うここは病院。

同じことを学校で言われたような、頭が回らない。

まだ人に囲まれてもいないのに、どうしよう？落ち着け、落ち着け、どうにかなる、何とかなる。

「大丈夫だよ。向こうまで行ってそれからどうするの？」

「一番奥まで行くと、非常口になってるんだ。そこは車椅子でも行けるように、緩い坂道になってるんだ」

心配そうな顔で覗き込みながら話す君。

悪いことをしているわけではないけれど、罪悪感が生まれる。

言っていないからかな？

「じゃあ、早く行こう」

壁に立て掛けておいた松葉杖を車椅子に座る君に渡し、車椅子を押し出す。

特に大きな音を立てるわけでもなく車椅子は動き出した。

思っていたよりは軽く、楽に進み出した。

座っている君が何かを話しているが、聞き取れない。耳から耳に空しく通り過ぎるのが自分でも分かる。

聞こえるのは、自分の荒くなった呼吸だけだった。

ナースステーションを通り過ぎ、左右に広がる病室をも通り過ぎて行く。

閉じられた扉や開いた扉。そこから人が見えたり見えなかったり。人が廊下に出てくる気配は無い。

何人かと擦れ違うが、異常をきたすほどではない。

看護婦さん、お見舞いに来たお母さん、たまたまトイレから出て来たおじいちゃん。

異常をきたすほどではない。

集団で擦れ違ったわけでもない。

それでも緊張は解けない。

いっどこから現れるかもしれない人達に怯えていた。

所詮、緊張していたところでどうしようもないのだけれど。

君を見た。

先程の元気はどこえやら、顔が青ざめていた。

声をかけることが出来なかった。

自分のことで手一杯。自分のことに使っている手を、他のことに使う勇気が無かった。

今の状態では、自分がなによりも大事だ。

廊下を進む。

今のところ問題らしい問題は起きていない。

先に進み、早く非常口から外に出たかった。

後少し進めば届く、そんな位置まで来ていた。
自然と足が早くなる。車椅子を押す手に力が入る。
やっとここから出られる。

そう思っていた矢先。

視界に一人の少年が勢いよく飛び込んで来た。

目の前に突然やってきた少年は小学生くらいの小さい子だった。
進路を塞がれ、僕等は止まってしまった。

焦る気持ちと不安で叫びそうになる。

どいて、早くそこをどいてよ！！

少年は僕等に気付く様子も無く、病室にいる誰かと話しているようだった。

病室から少年と同じ小学生くらいの子が顔を覗かせた。
嫌な予感がした。

このまま少年の横を通り過ぎて外に行きかった。

でも病室からは次から次に、子供が溢れ出していた。

寒い。

助けて。

誰か、息が出来ない。

子供達も見れない。

君も見れない。

何も見えない。

霞んでいく、白い、ぼやける。何も見えない。

気持ち悪い、吐きそう、頭が痛い。痛い。

痛いよ。

気付けば外に出ていた。

非常口に無惨に飛び散っている嘔吐の痕。

緩い坂にだらしなく、汚く醜い川を作っていた。

これが僕の病気なんだ。

惨めで、可哀相、弱いからなにもかもが弱いからなる病気。本当
情けない。

泣いてしまいそうだよ。

第4話：幽霊と緩い坂

非常口に座り込み、涙を流すことしか出来なかった。

見上げた空は、虚しい灰色をしていた。

風が強く、今にも雨が降り出しそうだ。

カラスの鳴き声が響いた。確実に僕を馬鹿にしている声。

あれ？いつの間に耳は聞こえるように？

見上げていた視線を戻すと、何かが無いことに気付いた。

君？

そっぴいえ君はどうしたのだろう？

立ち上がり、非常口に耳を当てる。何も聞こえない。

恐る恐る非常口のドアを開けた。

子供達は居なくなっていた。

廊下には車椅子と松葉杖だけがポツリと置かれていた。

君はどこに行ってしまったのだろう？

今日もいつものように屋上に向かった。

一階の受付、薬を受け取る待ち合い室、喫煙室、やはり人が溢れており、逃げるように階段に急ぐ。

エレベーターの前を通ると故障中と書かれた貼り紙が消えていた。

緑色のドアは開くことはなく、降りる人もいない。乗る人もいない。

僕は無視して先に進んだ。二階、（省略）、六階、七階。階段を上る。

いつも以上に急いで、休むことなく進み続けた。

暗い真っ直ぐな廊下。

ドアが一つだけ…、開く。

眩しい光りが差し込んだ。

やはりそこに君は居た。

「おはよう」

流れる茶色い髪。

中途半端な笑顔。優しい、泣きだしそうな笑顔。

昨日夜に降り出した雨が、そこらに小さな水溜まりを作っていた。今は止み、昇りきっていない太陽が新鮮だった。

「聞きたいことがある」

「何？」

「君は、人間じゃない。」

呆気にとられた顔でこっちを見ている。

「君は人間じゃない」

優しい顔に戻り、続けてと呟いた。

「昨日手を繋いだときからおかしいとは思ってたんだ」

君は空を眺めている。

「手を繋いだとき体温を感じなかった。それに骨折で入院。僕の気分が悪くなり非常口を出て、すぐに中を覗いたのに君は消えていた。しかも、車椅子と松葉杖を残して……、おかしいよね？」

君はまだまだ空を見上げている。

「何で消えたのかは解らないけど、君はもしかしたら幽霊じゃないの？」

笑った気がした。

微かにふっと笑みを浮かべたように見えた。

「そうだよ。俺はもう死んでいるんだ」

君は振り向き言葉を続けた。

「お前が来る少し前に、車椅子に乗ったままエレベーターに飛び込む事件があっただろ？あれは俺だったんだよ。俺はあれで死んだんだ」

ウソツキ。

「さようなら」

君はそう言うと、幽霊らしく全てが薄くなり、そのまま消えていった。

君の目には涙が浮かんでいた。

本当に進学校出身？馬鹿だなあ。

屋上に取り残された僕は、特に急ぐわけでもなく屋上のドアを開けた。

廊下を進み、階段を下りる、六階に着くと非常口までの廊下をまた歩き出す。

午前中はやはり人が少ない。人は居るけれど、溢れるほどは居ない。

小学生達も今は学校だろうし、お見舞いに来る人はお昼から夕方が一番多いようだ。

何事もなく非常口まで到着した。

そこからまたドアを開き、緩い坂を下って行く。

誰かが片付けてくれたのだろうか？

雨で流れたのだろうか？

嘔吐の痕はキレイさっぱり何も残っていなかった。

汚い坂をゆっくり下る。

坂を下りながら、君を思った。

君は人間だよ。

君は死んでもいない。

今会った

「君」は曖昧だけど、これから会う

「君」は消えたり出来ないはず。

同じだよ。

君と僕は、きっと…。

第5話：君とドアと僕

君は人間じゃないという言い方は悪かっただろうか？

正しい言葉が見つからなかったんだ。

ごめんね。

坂が終わりを継げていた。坂は病院の裏側に辿り着き、君に辿り着く。

病院の裏には隔離されたように二階建ての小さな病棟があった。

僕は知っている。

僕も一時期ここに居たことがあるから。

病院から続く道を歩く。中庭の端にその病棟があった。

僕はドアを開けて中に入った。

受付の人は誰も居なかった。

二階にあがる階段を上り、一つの部屋をノックした。

コンコン。

中指の骨で叩くとそのままの音が響いた。

「誰？」

中から声がした。

「僕だよ」

少しの無言。かすれた声が返ってきた。

「よく分かったな」

この部屋は君が入院している部屋だった。

「ちょっと待ってる。そっちに行くから」

ドアに背を預けて座ると、君も同じように座ったのだろうか？ドアが軽く揺れた。

「悪いな。病気がひどくてまだ会えないんだわ」

ドア越しに君の声が響く。

「分かってる。大丈夫だよ」

少しの沈黙。鳥の声。太陽の光。音すらない病室。

「いつから気付いてた？」

君は今何を見て話しているのだろう？

「手を握ったときは変だな？ぐらいだったけれど、車椅子を押しているときの青い顔を見て、そしたら消えたから…、君はあの坂を下ってどこに行こうとしたのかな？って考えて…」

自分の手？窓の外？床の木目？僕は同じもの見れているかな？

「幽体離脱だっけ？幽体離脱して僕と出会って、ここに連れて来ようとしたんだね」

天井を見上げると、君の髪に近い色をしていた。

「僕等同じ病気だったんだね」

ドア越しに君が泣いているのが分かった。

君はもう外には出て来ないだろう。

遊びに行っても君は部屋から出てくることは無かった。

病気を思いだすのが嫌なのだろう。

僕も病気は決して良くなったとは言えない。むしろ、悪くなっていくぐらいだ。

でも、僕はまだ外に出ることが出来る。

君は出来ない。

君と出会って二年ほど経とうとしていた。

ドア越しに話をするのは変わっていない。

ふと天井を見上げる。

確か君の髪の色に似ているんだったっけ？

もう思い出せない。

僕は本当の君を見えないまま過ごし続けていた。
言えない。

出て来て何て言えない。

それは

「死んで下さい」と言っているようなものだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6765c/>

見える君、見えない僕

2010年10月8日15時52分発行